

【巻頭随想】

「わが国におけるワイン経済・経営研究領域の認知をめざして」

小田滋晃

平成14年度から3ヵ年の計画で「ワイン・ビジネスの展開とそれを取巻く社会・経済環境に関する国際比較研究」という研究課題に対して文部科学省の科学研究費を使わせていただく幸運に恵まれた。この研究課題の申請に際しては、平成12年3月末から約1年間の加州大学デービス校での在外研究での経験と成果が大きなベースとなっている。この在外研究の課題は「アメリカ・カリフォルニアにおける果樹生産・加工経営及び産業のファイナンシャル・マネージメント問題に関する研究」であり、受入学科は「農業・資源経済学科」であったが、ASEVの事務局がある「ブドウ・ワイン学科」が提供するワインに関する様々な公開講座のほとんどを受講する機会を得た。特にデービス校と仏OIV共催の「ワイン・マーケティング3週間コース」は内容・講師陣共に充実しており大きな刺激となった。また、当時「ブドウ・ワイン学科」に研究員として来られていた日本のワインメーカーの方と親しくしていただき、一人では決して得ることができなかったであろうブドウ・ワインに関する貴重な情報をご提供いただくことができた。「日本ASEV」のことと共にASEV本体の年次大会もこの方から情報提供していただき、お陰でシアトル大会に初めて参加する機会を得た。ただ、大会での多くの研究発表には興味は惹かれたが専門から遠いこともあり理解することは困難であった。しかし、同時に開催されたエキジビションでは大きな興奮を覚えた。ワインを巡って様々な産業が関連し、ビジネスに結び付けている様は想像していたスケールを大きく超えるものであり、米国での研究課題に直結するものであった。さらに、この年次大会では他の日本のワインメーカーの方やブドウ・ワイン研究に携わっておられる研究者の方と交流させていただき、貴重なお話をお伺いすることができた。同様に、9月にナパで開催された「ワイン・ファイナンシャル・シンポジウム」や翌年1月にサクラメントで開催された「ユニファイド・ワイン・シンポジウム」についても情報提供いただいたお陰でこれらの研究集会に参

加し、勉強させていただく機会を得た。

この年、たまたま山梨大学のワイン科学研究センターから先生がデービスに来られ、先ほどの日本のワインメーカーの方がお世話をされることになり、ご紹介いただくこととなった。短期の滞在ではあったがその間この先生と意気投合し、デービスの拙宅にもお越し頂き親交を温めることができた。これをきっかけとして翌年(平成13年)山梨大学で開催された日本ASEVの若手セミナーに呼んでいただく機会を得、報告をさせていただくこととなった。そして、この時のコメントやサジェスション等も参考にさせていただき先の科研費の申請を行い、首尾よく採択された次第である。

この科研費により平成14年度からの3年間、毎年仏モンペリエのINRAを拠点に国内ワイン生産量が最も多いラングドック地方の調査をする機会を得た。折しも、ワイン王国フランスにおいては急激なワイン消費の減少が続く、日本の「米」以上の問題を孕みつつ、待ったなしの対応を迫られているというのがフランス農業の現状であるといえる。ブルゴーニュやボルドーの銘醸ワインと違い、ラングドック地方は正に地ワインの産地である。ここで、いま大きく二つの対応方向が観られる。一つは、在来種のグルナッシュやカリニャン等からカベルネやメルロー、シラーといった国際的流行品種に更新し、オーストラリアやチリ、南アといった新興産地と対抗しつつ世界市場で勝負を挑む対応である。他方は、地域資源との関連を重視し在来種を守りながら国内消費に重点を置いた対応である。前者を目指す地域は、いくつかの醸造協同組合が連合し販売のための巨大なユニオンを形成している。その生産規模はボトル換算で年間数億本である。マネージャーは高度な財務・マーケティング技術を駆使しつつ国際競争下で収益を確保することが求められる。同時に常に巨大な在庫圧を受けることとなる。他方、後者では地域資源との関連を「ツーリズム・テロワール」と称し、地場消費を重視しつつ、地ワインを地場の歴史・観光資源や風土・気候等とも関連させながら、それら

を理解する消費者に販売していこうとしている。この方向は、正にわが国の中小ワイナリーの多くが目指してきた、また目指している方向であり、その意味でわが国が方法論において先進的ですからあるといえる。ただし、この方向は加州や他の新興国産地ではほとんど問題にされず、手間がかかり「儲かる」方向ではない。

農業経済・経営の研究者としては、どちらの方向にも研究対象としての魅力を感じるが、農業構造問題が大きく滞留している日本やフランス等のヨーロッパ諸国での農業の本質を見据えた時、どちらの方向を目指すべきかという問題はワインだけの問題に留まらない。

ブドウ・ワインの生産や研究に携わっておられる日本ASEVの多くのメンバーの方々にお世話になりながら、ワインを通じてこのような農業問題に切り込む醍醐味を味わうことは農業経済学研究者として大きな知的財産となりうる。今後、わが国においてブドウ・ワイン産業の発展に少しでも貢献させていただけるよう、わが国におけるワインの経済・経営研究の領域の認知と拡大を目指し努力していきたいと考えている。今後ともお力添えいただければ幸いである。